



門 45
 號 1413
 卷 37

早稲田 大塚 豊田
 昭和 25.10.24
 蔵 入 来

如銅



廿五日 録 参 始 五

あて天 明六 丙午年 江戸 来し 見 阿 録 に 上 野 下 込 に
 如 銅 め を 食 せ 記 事 に 膳 に 飯 盛 上 杯 け
 概 に 豆 腐 の 煮 物 焼 の 香 也 如 二 銅 書 し 木 れ の せ
 と 持 来 ち 客 の 成 ち 金 ず と 同 し 娘 に 膳 を 持 来 ち 先 の
 膳 を 引 ち 前 の 木 姐 を 強 し 皿 勘 定 の ぬ ば 木 れ の 数
 じ と 飯 を 求 ち 由 ち あり 妙 妙 市 に 久 々 木 姐 木 れの
 と 画 入 ち 委 し と 妙 妙 の 見 阿 録 百 八 十 冊 あり と 七 年
 二 月 妹 弟 吉 久 妙 妙 書 店 を 一 見 せ 妙 妙 由 因 に 三 天 明
 の 頃 三 戸 に 移 ち 一 膳 の 金 の 始 ち 成 の 公 毎 膳 を 替
 考 ち ち 考 ぬ の 様 見 ち 是 ち



印度學

印度製金鉢



高 一寸九分
口 二寸九分
底 一寸九分

とある。このめえは、その大工の者の種をたぐりてゐる。
さうなつて、いふに、現今のこのいふやうな時代には
思ひやうもなからぬ。それこそ、大工の生れた女が
歌をうたへてゐる。

矢敬モツケイ 花モツケイ 花がサイタラマタカ出¹

これら供が別れ、ゆき、おといさば、此のまじりがくると
これにて、すめ代もあれど、花がさう又の出の言葉は
あかりと、愛なり。

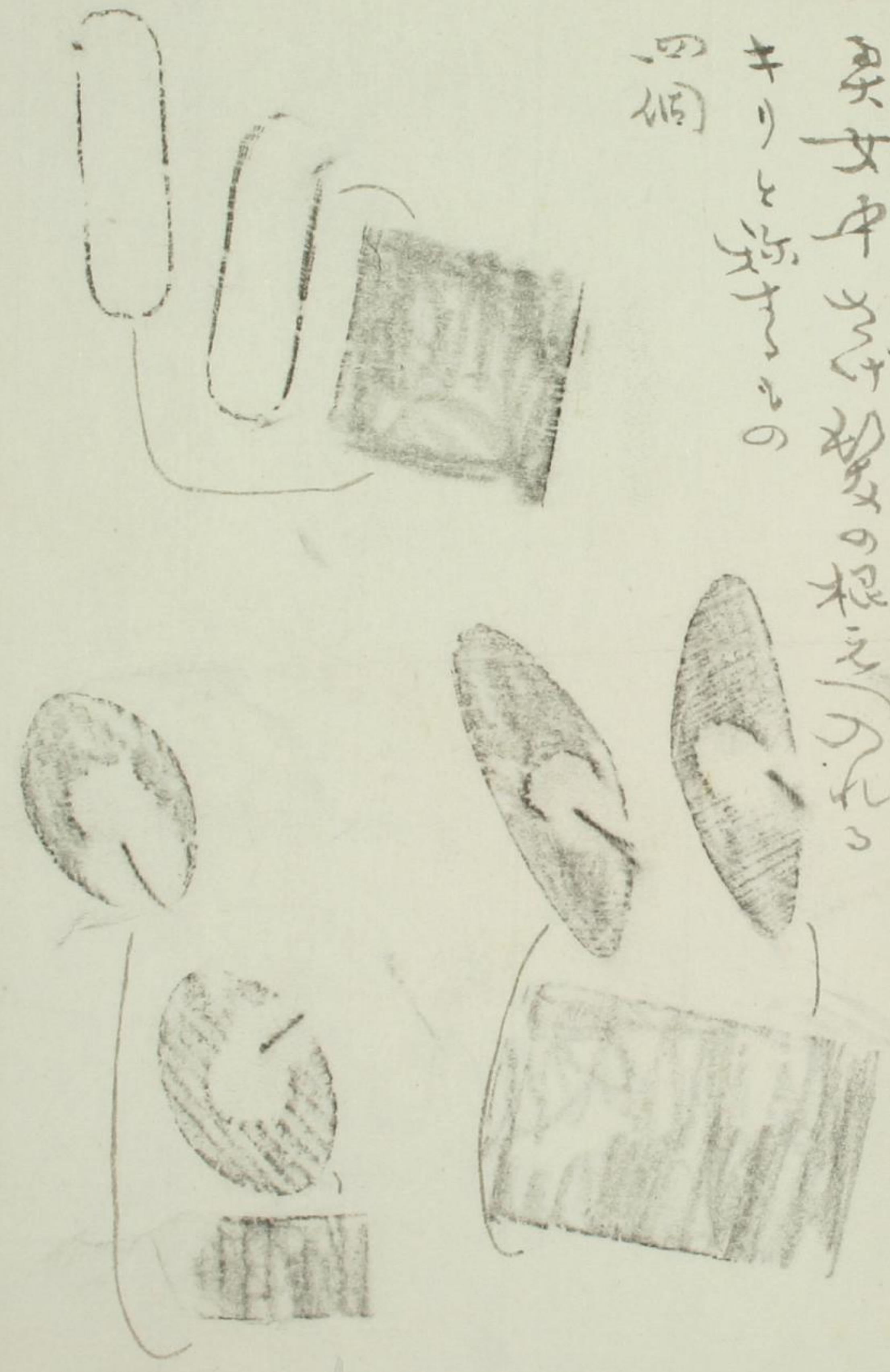
今、四景を見ても能はず
 今、三年も過ちりば
 猶、一層の憂ひに見え
 ことなりしを明かされ
 年以りて、憂ひのけり
 煙、心石、跡を始にけり
 ことなりしを、今、人、家
 立、遠く、何、心、けり、知れ
 ぬ、始、なり、也、憂、年、場
 が、出来、り、也、憂、年、場
 ことなりしを、今、人、家
 ことなりしを、今、人、家



夢、い、さ、せ、せ、う、を
 其、村、の、女、を、下、女、に、逢
 其、家、に、あ、い、ま、し、め
 又、い、さ、せ、せ、う、を
 其、村、の、女、を、下、女、に、逢
 其、家、に、あ、い、ま、し、め
 又、い、さ、せ、せ、う、を
 其、村、の、女、を、下、女、に、逢
 其、家、に、あ、い、ま、し、め

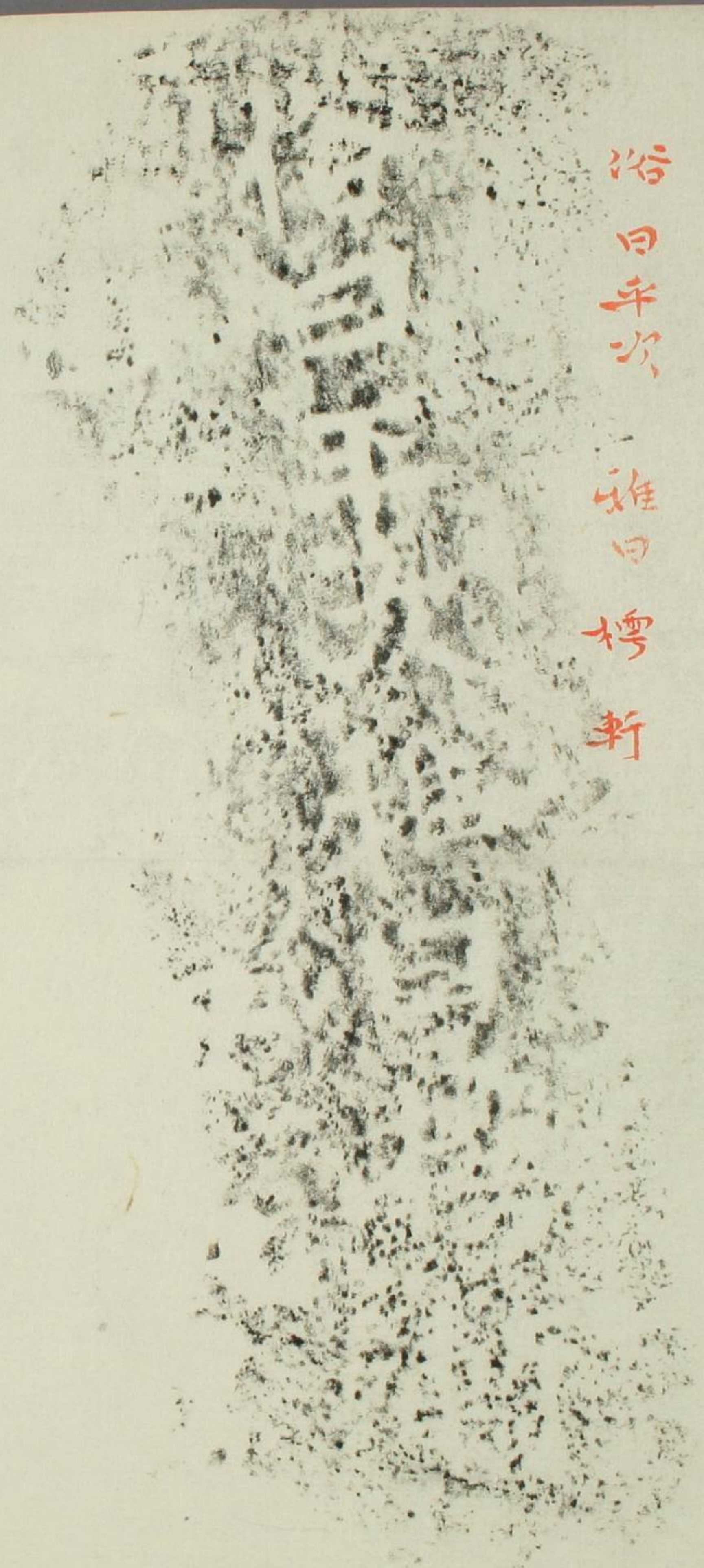
女中
 女中
 女中

女中、さ、げ、め、の、根、え、つ、れ、
 キ、リ、と、お、す、る、の、
 四、個

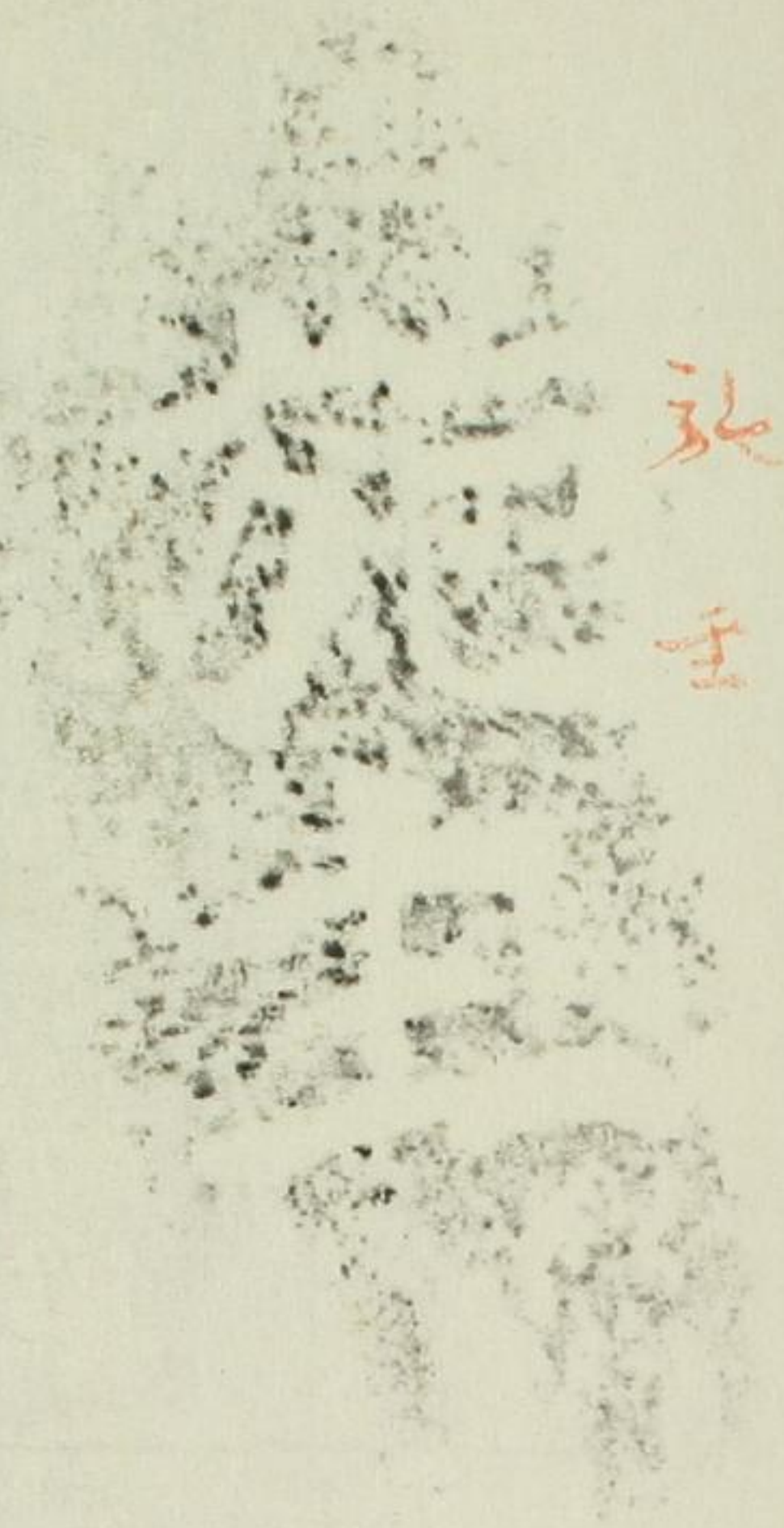


考亭集卷之四

俗曰平次
雅曰樗新



弘
王



本
鄉
平
月



[illegible]

為馬也

下
戸
喰
仕
石
也
後
の
前
を

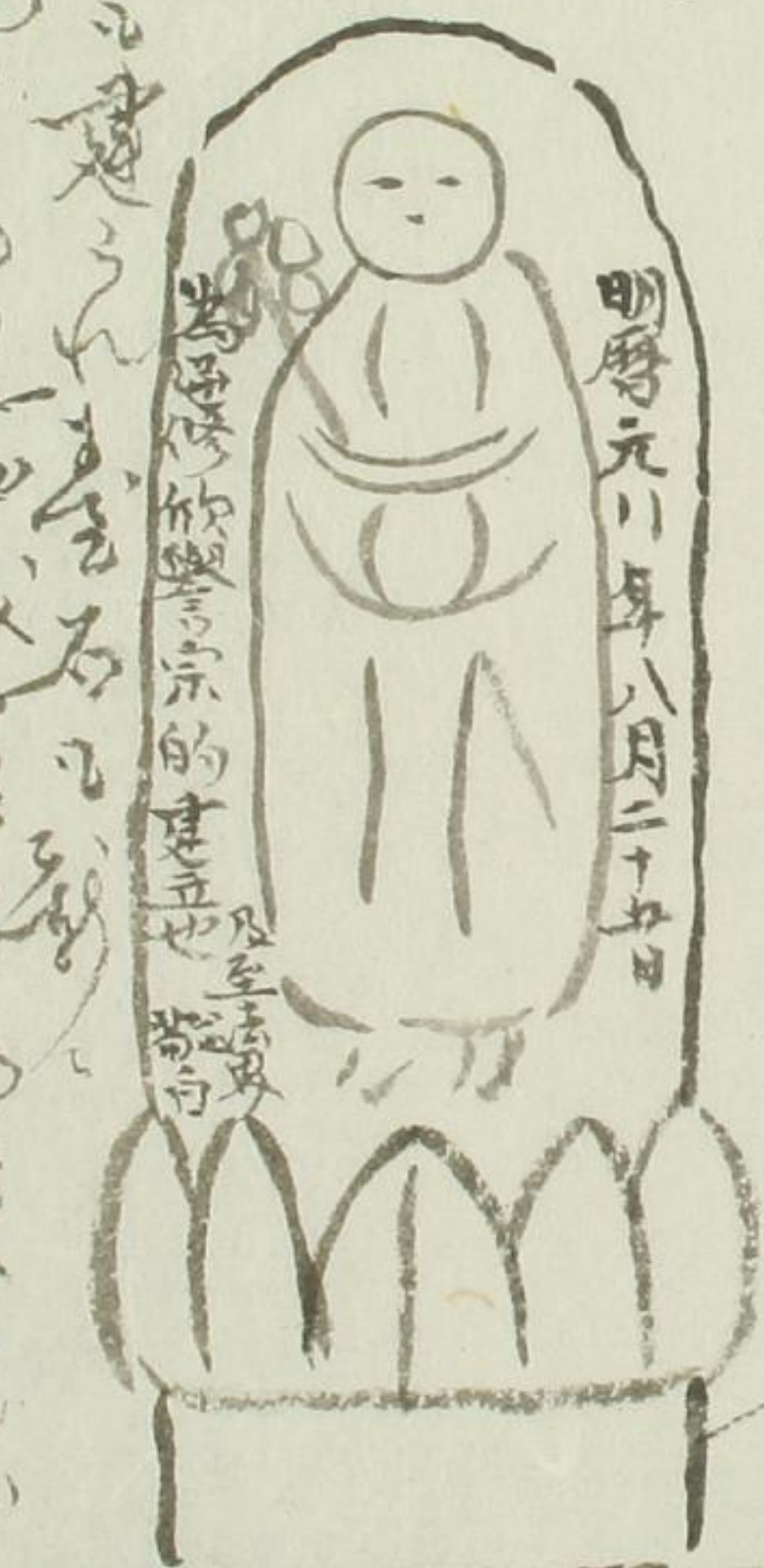
高橋

しゐのめと来
う横面うて

たけしやうの堂の建えしとき

造られて出来たるやとありし世に
 前の世に復したるものなりとあり
 大正七年二月
 辛卯月

大正七年二月
辛卯月



明曆元川身八月二十九日

為過修欣樂宗的建立也及至去夏

新石記

梅雪堂の
石の如く

[illegible]

古、
今、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

川越を西へる里川角村の大寶寺跡と云ふ所
三石の下に大梵宮あり大板石あり越の古蹟と云ふ
東京の名古所と云ふを夢に人ハ佐々木と云ふ
いふ者も種々あり明和七年に馬喰町四月卯辰
寺の角に在る面を破り帝業せしむといふは此寺也
の外なりと云ふ今三石の遺蹟をわたり古蹟の傳記
大正七年春、
馬喰町に在る

三竹堂の巻
取記行

大正十三年十二月廿四日
 回七戊午年一月六日に至る迄
 原政宗より比叡寺へ送らるる三封の清紙愛宕洞を
 通し送り給ひりて蛇馬頭と題さるる世に覺し
 らん其申すも凡そ考古なるを云ふものを云ふはたゞ文
 は原の如くにあらずが斯うに改めおかしきなるものゆゑ

遊行寺のぬけ角にある散書や写本の圖をみる角長き
 書本より斗其角の書は石散書と行せしもの其下に口口口

石鼓當

滿願堂

満願堂とあり、裏に聖授金襴國某店とあり、均如堂とあり。

[illegible]

この世にあらん心ありてあつた
此の世にあらん心ありてあつた



に同じ
してあり
牛のまゝ
原形と
病ありとの
信牛の
の草芥
葉原に
も同じ
信し
なり

一月で多量の
この教書は白紙の田子手と押して
その餅とを後院大根を寒の月よりして万々大根とある
さうなすく中なく其のふくらにありとある其下は
とふさあ教書一葉をふねの細きとを同じ細きと
れどこの世も其のつとを別とてこの世と
二葉より書きたる伏見するもの細きのふくらとを
の茶店とすうらに提籠るそれと教と踊場とを
おめもさうさ老いさうの世もさうさういふ山のある
いさうれさうのつとを同じこの世とを踊場とを
なうさうさうのつとを同じこの世とを踊場とを
何うつとを茶店とすうらに提籠るそれと教と踊場とを
此山との方をふねとをさうさういふ山とを踊場とを

大社の境ありといふみぎのつとを同じこの世とを踊場とを
さうさうのつとを茶店とすうらに提籠るそれと教と踊場とを
はえた人ひきさきさうの世もさうさういふ山とを踊場とを
さうさうのつとを茶店とすうらに提籠るそれと教と踊場とを
さうさうのつとを茶店とすうらに提籠るそれと教と踊場とを

東福寺七不惑のつとを同じこの世とを踊場とを
さうさうのつとを茶店とすうらに提籠るそれと教と踊場とを
油汗の子とを茶店とすうらに提籠るそれと教と踊場とを
自とさうのつとを茶店とすうらに提籠るそれと教と踊場とを
清ののつとを茶店とすうらに提籠るそれと教と踊場とを
石清のつとを茶店とすうらに提籠るそれと教と踊場とを
寛永十年癸酉
寛永拾一年
八幡宮

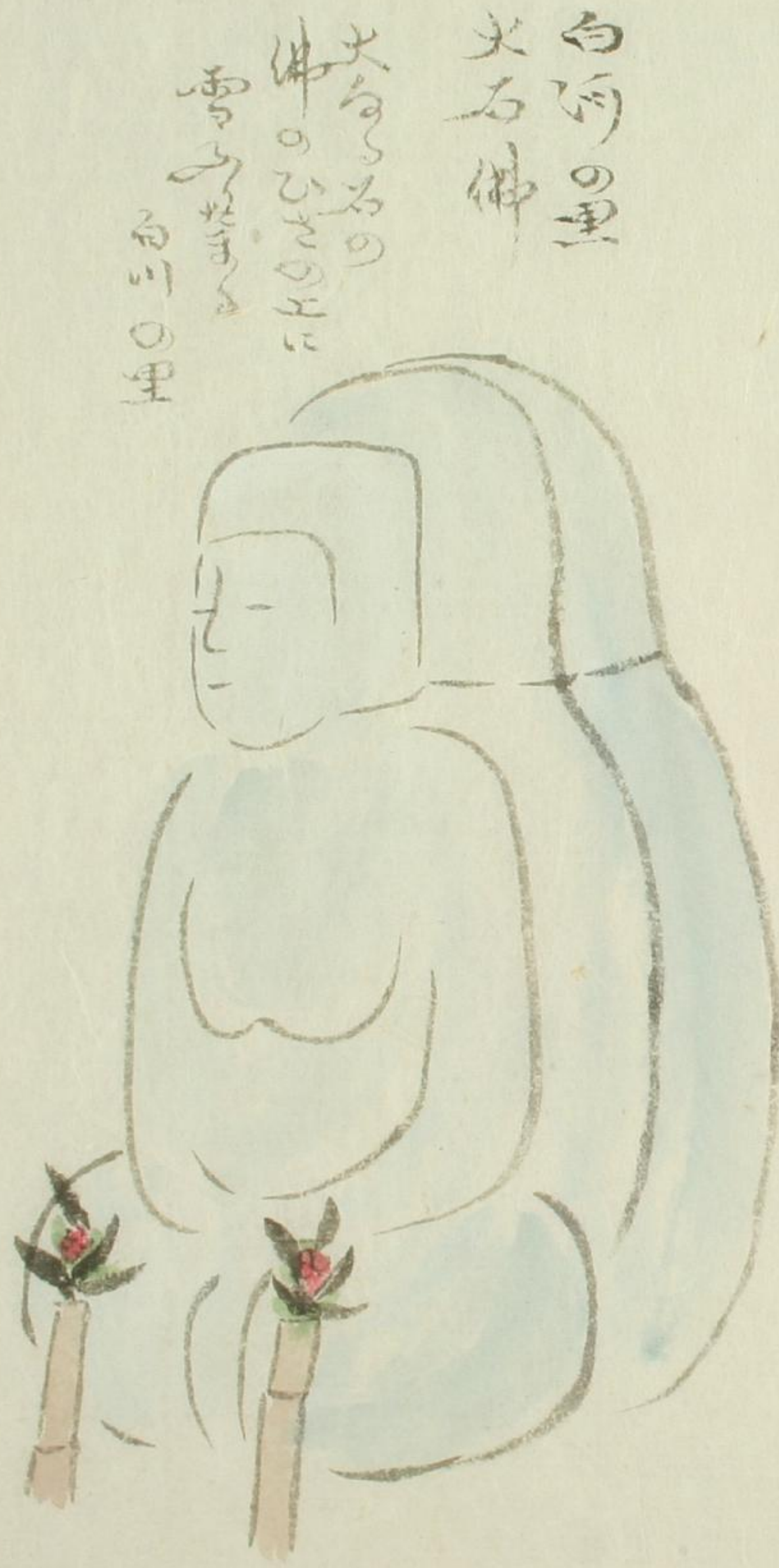
いさぎ餅のちきり
 中一箇のつれと外を
 豆のちきりをまぐ
 ちきりものこの城
 はこのちきりの名わ
 りぬるこの菓を
 りも煮るみり
 早るをいさぎ餅を
 して其のちきり
 ちきりちきり
 まる三寸半であま
 なる餅もちきり見ぬ
 かけ餅もちきり古風



此餅もちきり
 ちきりちきり
 ちきりちきり



運と記し
 ちきりちきり



白河の里
 大石佛
 大石の
 佛の
 雪の
 ちきり

二に節分あつて殊に人々をいあはしめてあつて節分の日
とちりにはあつてや

休更土面子紅ら群者る彩り金砂子ま



廿五三の桐類の丸巻のふちが／＼のめんちあり此間略す

三前年如竹清里の船中より好む所のものをかき
とて、心所をそへ
大正七年三月に雪嶺のあた

蛇尾馬頭上題云
高麗歌
七
共

主題はぬのねたが本件をうたふといふことなり

[illegible]

高甲現に地にも持者を見うさる焼く女先代の西千三郎の
道れ椒地にはとあり又田螺の図ありなりあは二己未大
命道れ大れぬるぬ結のるる上中、焼く大なるの
納六万七圓下につく樂玉粧る、如坐金ふ、
赤久きう、津奴舟、ゆくゆ、田螺筆号久きうあ
ものなり、楊川、藤成の、ぬれ上、三柳形に、妖玉の、
あ、この、山、く、夢、なり
本蝶、國、負、画、さ、な、千、社、説、の、錦、繪、山、女、香、う、ち、や、り、が
一々、山、女、香、の、名、つ、れ、あ、る、七、枚、お、り、あ、り、井、の、の、前、は、明、
海、崎、解、天、白、粧、真、流、福、あ、梅、枝、深、川、八、幅、あ、ら、ぬ、
金、る、福、あ、洞、休、如、う、あ、り、ね、あ、る、白、装、梅、香、
号、の、七、枚、あ、り、外、に、も、あ、り、か、も、う、ず

安政の、れ、は、数、珠、市、あ、る、名、あ、り、昔、の、喜、提、れ、あ、り、
き、れ、に、二、代、り、数、珠、市、と、て、先、代、の、千、申、鼻、月、六、日、死、す、
の、文、り、を、載、せ、し、千、申、明、治、五、年、な、め、え、数、珠、市、あ、る、名、
二、代、あ、る、を、い、や、
呂、友、右、持、の、文、に、安、政、の、大、れ、す、これ、大、の、巾、を、又、以、上、の
里、玉、堀、れ、大、釋、杖、を、圖、し、て、紫、衣、書、い、て、東、に、紫、衣、盆、米、
と、あ、る、の、盆、米、な、る、名、何、れ、か、と、思、い、つ、た、大、れ、な、り、
安、政、の、後、の、れ、の、中、に、左、の、文、り、あ、る、も、の、を、い、や、
中、仙、福、子、社、参、り、ハ、付、古、き、今、に、昌、三、郎、中、文、久、慶、應、の、年、
而、京、橋、り、所、の、加、奈、傳、方、を、醫、れ、の、趣、向、あ、り、し、
皇、今、の、席、に、あ、り、細、れ、に、る、久、と、い、て、
常、め、京、橋、り、所、に、皇、今、あ、り、し、甘、地、ぬ、れ、交、換、を、
の、日、録、十、七、に、記、し、を、し、め、え、終、す、

又神子の繪馬をもも中、くうのふを思ひーもの、
皆て三本画さるもの

鶴也

鶴也

乳の乳のやに書ける

うだ糸を巻ける

あふふ

其外にやあしあし、仙の所を世不明るあり

時す鉄盤三入、中、守、心、の言を、鏡、城、し、の

なにもありたり

武、少、る、色、山、赤、子、の、面

大坂北の天

不動者

大坂錦八幡

錦

天、玉、加、納、村、天、の、面

天、玉、加、納、村、天、の、面

泉、勝、大、寺、の、中、に

大坂北野院

大坂北野院

白、蛇

大坂木村

大坂天

京都、錦、八、幡

死、魚

大坂山、村、の、田、舎、の、男、女、隊

大坂天

京都、錦、八、幡

死、魚

大坂寺、の、中、に

大坂天

京都、錦、八、幡

死、魚

信、濃、の、中、に、お、司、の、中、に、お、司、の、中、に

石、橋、の、中、に

お、司、の、中、に、お、司、の、中、に、お、司、の、中、に

フシタニ世

寶曆六年、秋の、春、来、の、う、泉、葉、子、を、う、藻、に

ヒ、イ、ニ、フ、ウ、ニ、フ、シ、タ、ニ、タ、ル、ハ、ヨ、ル、モ、ヒ、ル、モ、ア、カ、イ、ツ、キ、ン

カ、ニ、フ、リ、ス、マ、イ、タ、ル、カ、サ、ル、コ、ト、カ

さ、ら、初、め、も、我、も、達、人、を、歌、中、に

京へ出しなす

所々に明の使回を蒙るに意を盡さんと云ふは、
いふまでも悲劇的のことも多しと云ふし、
傲を極めたところを見え
る。

わいあはば、
この原の官連にあらうと、
あつたのつ所の、
見。

所の致した事、
元禄十五年には、
天保四年

年が、
天保四年

女、
天保四年

天保四年、
天保四年

か見たりと云ふは、これに就いてあれど、實際は、然るもせざるありと云ふ
こと、此の要山の名に、わづかある、然るも此の老の後、繼
者、小の書に、かしとの、是なり、極井父は、大書の
まね、編纂、も、おもしろい、人也

平太常の書

元祿の頃、大晦日の夜、門徒宗の寺に、平太常公
の物語を、読教させ、と云ふ、而も、説く、も、あり、と、覺ゆ、今
も、元に、いふ、あり、か、おもしろい、事、目、も、忘れた、れ、其、事、を、行、を
く、つ、み、平太常、ハ、常陸那、阿、即、大、部、野、の、庶、子、也、其、所、刑
部、左、衛、門、東、方、の、若、殿、の、事、あり、熊、野、へ、い、く、今、せ、ら、る
中、略、難、行、を、始、難、し、て、正、行、に、帰、せ、よ、と、教、へ、さ、せ、然、し、け、れ、バ

首の書

弥陀を念す、外別に、現世の、幸福を、祈る、難、行、なり、自、ら
行、す、に、あ、る、と、思、え、行、す、人、に、く、み、せ、バ、我、ら、す、に、同、じ、か、ら、で、
中、略、と、思、い、取、り、人、に、一、一、聖、人、作、ら、れ、と、抑、も、知、光、の、方
便、ハ、衆、生、に、結、縁、し、て、佛、道、に、引、入、せ、ん、と、有、り、然、ら、バ、向、に、念
佛、し、て、諸、人、に、何、ん、の、憐、れ、も、あ、る、と、思、ふ、と、云、ふ、と、平、太
常、ハ、親、戚、等、と、同、じ、の、同、心、を、あ、る、に、我、れ、ハ、真、宗、の、教、を、
編、纂、し、て、い、ふ、と、思、ふ、と、云、ふ、に、い、は、し、に、同、心、を、あ、る、と、云、ふ、と、
書、を、見、し、て、い、ふ、と、思、ふ、と、云、ふ、と、思、ふ、と、云、ふ、と、思、ふ、と、
佐、久、間、長、教、翁、ハ、此、の、書、は、四、幕、め、代、ハ、結、力、を、あ、る、と、思、ふ、と、
人、な、り、同、心、の、書、に、同、心、を、あ、る、と、思、ふ、と、思、ふ、と、思、ふ、と、
思、ふ、と、思、ふ、と、思、ふ、と、思、ふ、と、思、ふ、と、思、ふ、と、思、ふ、と、
と、思、ふ、と、思、ふ、と、思、ふ、と、思、ふ、と、思、ふ、と、思、ふ、と、思、ふ、と、

与力は古今一と刀は同心のともとなり然し然し實際は山田の子の
昔より首を切りしとは御紋かと思ふに山田は御刀御註御用を
の作り居るものにてまづぬき流す刀の証をいひて此種つ
藩士もち首胴印重々胸をその証を傳へするのみなる富の
穴子といふ者あり山田の方を常く切り印の證古あり
ころを抱居ると胸を形どる下の土は赤土と極こまめな砂とを
交ぜて塗すことを試切りの證古をぬきこれをすすこれら
昔の人ある時首切りに出ることを其時首切當面にあたり
たる同心は金を金をかき送りて成りをぬきこれ自然のれを同
心一定の刀研料をかき上り受けるの外は山田の子よりも
多くをぬきにも首切當面の者が金二分の傷があるを
なり首切にはある者山田の子下のあると出さういと許

葉玉の替ハ
お酌くりてな
綿緬紙に

今日の晩

可きとありなり 山に別は武用の為と今をいふには
 年一と然し麴所何所の所并領地に世代もなれ外に
 諸大名の武用や又人勝や某用とありなり申すは
 のものとよまはし武用の為なりとありてお福の事なりと
 明治年地とありて見ゆるものなりとありて
 なれり 節り敷き 銀金具の服守銀の指輪びうのたき
 茶碗のたきなど 銀のちりしき 金糸の根城
 手習札 奉書の手巾 根のきり かしき
 竹馬のたき 松苗 楓竹 水雲
 変湯見せ とうかえり 船
 昔日錦中も既ふなしに言ぬてあけしもあえりなれと
 復つていふもあきなりとありていふなり

伊豫國
の土俗
の山俗

伊豫國温那郡の山中に、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

温那郡の山中に、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

温那郡の山中に、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

其量多き故に、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

一、温那郡の山中に、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

高野及諸郡に、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

ヲカー(カ)は、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

威風凛々たる、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

人々を呼ぶに、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

キビス(カ)は、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

右の如く、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

名詞の如く、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

朝又と、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

コサイマスナ、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

暮れ、
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。
所々、人々の居る所あり。

[illegible]

子供は月を指し示して、サニと云

月^{ツキ}に^ニ一^{ヒト}の^ノ店^{テン}あり^{アリ}苦^クし^シもの^{モノ}を^ヲふ^フ

の、えんば十三れッまだわかい

元々佛堂に十人の衆ありて二は細く七は其倍の

巨敵にあつてはたゞを責め買ひの嫌をぢや

甲子賣ろく
乙子や買せ
甲つれつんでひにくす

天から降つた金の糸を
金箸でくすす甲それは
あまうり

たつた川の水を
ちやうどしやうの
みでくみ出す

甲
それはあんまりなまぐさい
ひこせこは茶漬やくす
この巻

終や否や甲の廻より乙の廻へ
例とすゝ近なり

イヌル (かえる)
ハタ (ふち)
アツノ山 (きんいちやま)

唐子孫は、
あきく
のう
強ち
ゆ
と
か
そ
其
母
又
は
守
ぶ

ツブと云ふ
讚丸急必
方と云は黒
色のゆゑ赤

に示してアツフと云ふ

伊勢國と阿波との関係したる事

阿彌の著述樂
伊との食ひ樂

農民の歌

其のふけ
錆どけ

駁以

駿河守郡大宮所
がよ
富士山
頂上迄の
里程

火を所よりかけす烟筒一重三十三丁かけす烟筒一重三十三丁

二合月三合月 廿二廿三

然の如く
 爲るは
 の里敷
 其處

鳥の字

上
驚

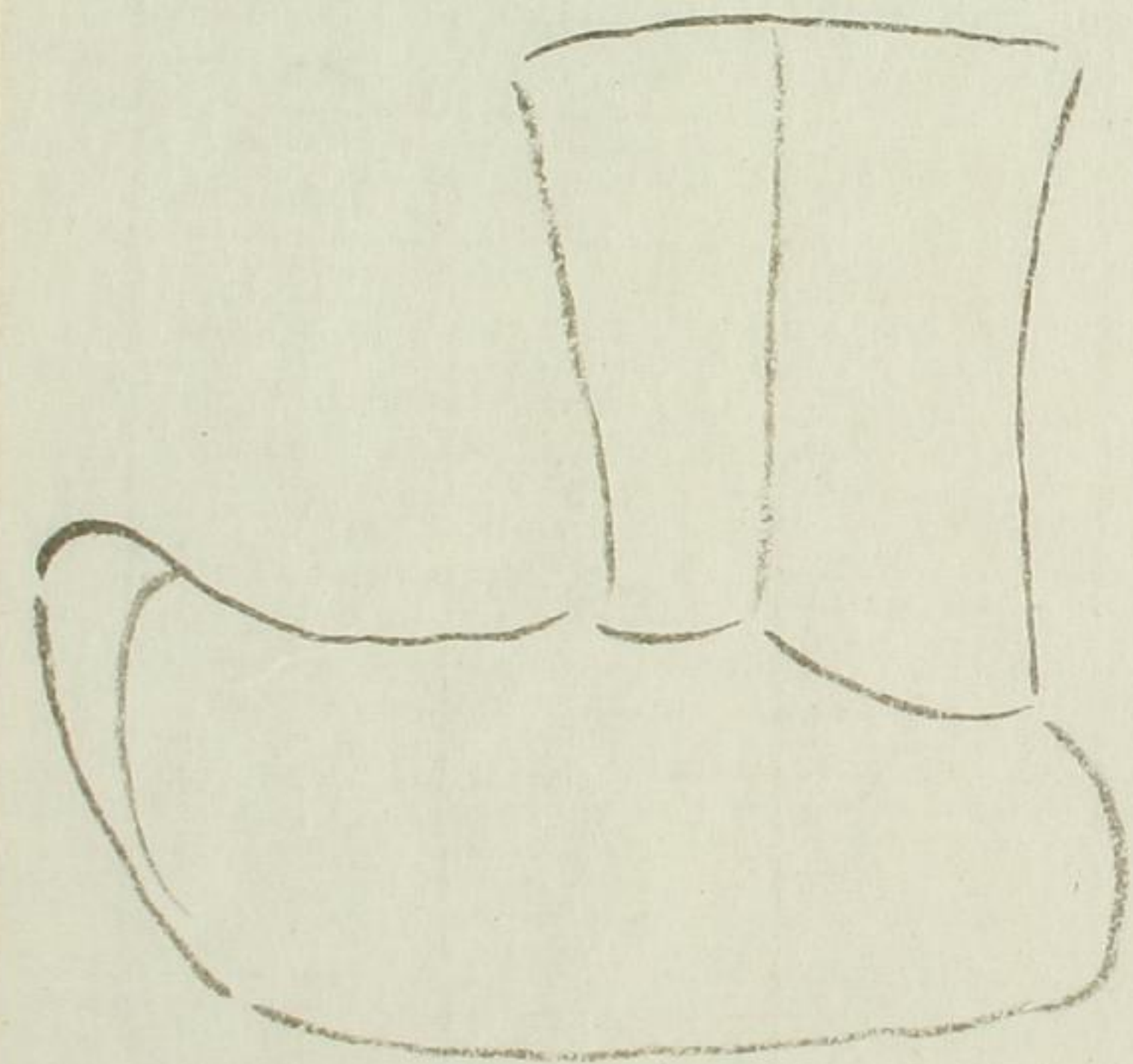
鷓鴣

實永八年
戒名
月、日
元祿
戒名
月、日

あ、この字は徐浩が書に象の字と爲とかけり倭書の中に象
の字と大方は爲とかけり多し按て祿字書云象爲上通
あ、この字にあらずや左すれば種々の元々佛像の像なりと云

鳥皮靴履

鳥皮靴
天平年向の
惣とよしの



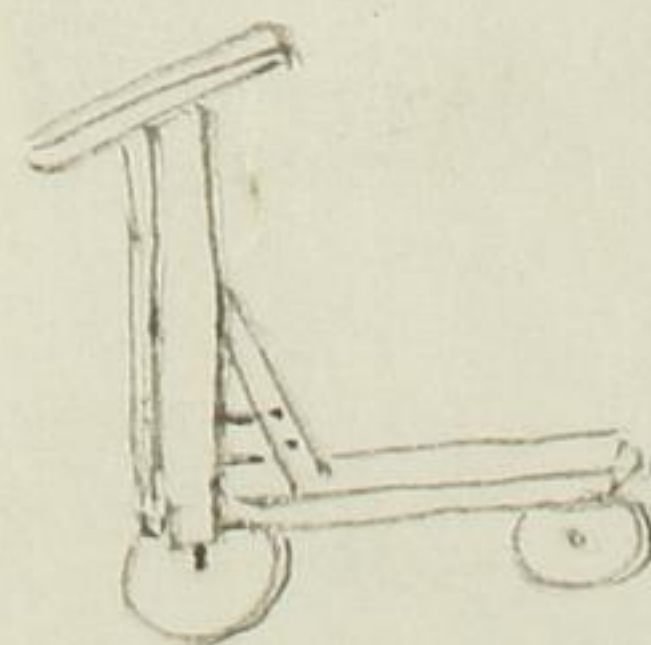
上
子
已
子
形

思ふに、さういふ

右の意

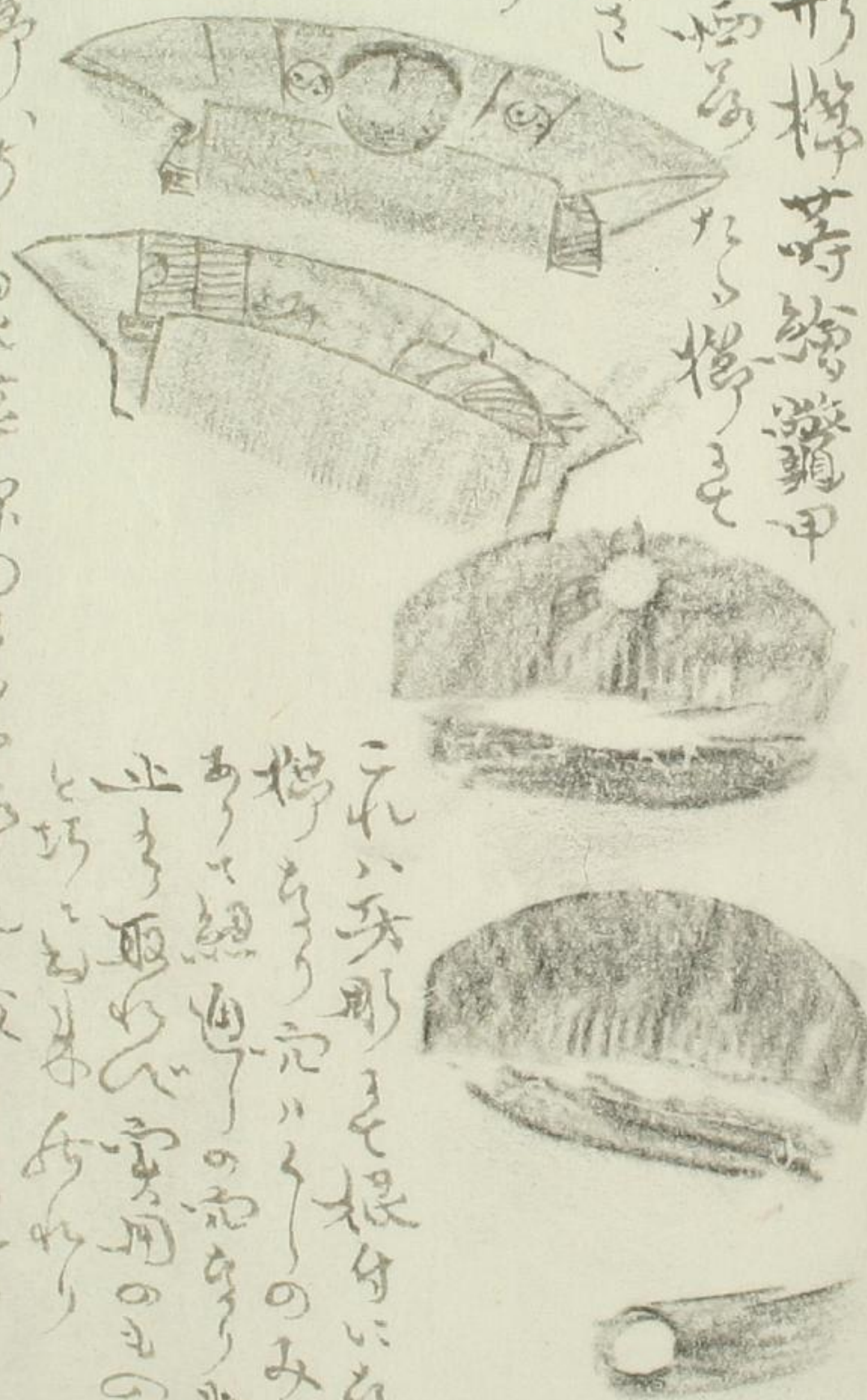


大正七年三月下旬に借入のスケイサイクルを返すに
 供これと物を返すより所を車輪二ツ横木へして
 取手を加へこれと現るものと
 此後スケイカーの所よりお返し
 するもの返すに供も亦同じに無
 事の返入をともなう所なり



福柳形の梅
と根の梅
の形

福助形構等繪鑑甲
如所云西家
面々著き
の九のち



元ハ大町を根付になつて
檜をう元ハのみの松に
あつて鯉の池をう遊先の
止も取らん実用のものあつた
と巧にもなり

名古流の
古流

三、
 名古、久、
 行、
 杯、
 名古、久、
 行、
 杯、

多岐の地をたづねて道に迷ふ所ありて新にゆり重なるに
石城として伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
成りて伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
いづれかの地のすかたをたづねて今の新にゆり重なるに
次の地をたづねて新にゆり重なるに
尋ねて伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
あやまりて伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
道に迷ひて伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
ちたふと道に迷ひて伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに

いづれかの地のすかたをたづねて今の新にゆり重なるに
石城の地をたづねて伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
成りて伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
いづれかの地のすかたをたづねて今の新にゆり重なるに
次の地をたづねて新にゆり重なるに
尋ねて伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
あやまりて伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
道に迷ひて伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに
ちたふと道に迷ひて伊予の地あり石城の地をたづねて重なるに

大塚とては、佐竹に別つて雪ふらん。武蔵の東も美濃の
谷もあすみ田舎のなまふくしやうり。武蔵野の末は濱崎と
して里崎より北に延びて立寄る所あるも、吾人の明水
には、猿橋といふ所の黒川石の寺は一軒あり、長坂といふ伏の
所より北に上り、坂の上より川の磯の名を傳へ、笛吹といふ川崎
なる所に、いづれ七ツ滝といふ霊山にせむ。此音曲をも、高に
つた今迄二月廿五日かた郷、すくみの夜に三月二日となり。
青柳さぬきの庄館林ちづかうの、おちどおち道々佐竹に
たり。宇津、五原心、社久しうつのみを立て行通ふ極の
もと、新井、荒川、朽木の郷、ふれふらなるの里、三

ちと遠く白河二河の間に到り矢つちとて砂越の道になぬの
 森とて木深き林あり人わまれづの山矢つちの別當坊ありなり
 田舎とて草むさかり成りの山あふま川志保の山を
 のり武隈の姫路を暫く立ぬるより末の山とてなぬの
 みやまの到り矢つちの山ありなりあかぬまの山あり
 なむちとて砂越の間に到り矢つちの山ありなり矢つちの山あり
 ついでに河越の山ありなり矢つちの山ありなり矢つちの山あり
 以上が河越の山ありなり矢つちの山ありなり矢つちの山あり
 昔古の河越の山ありなり矢つちの山ありなり矢つちの山あり
 順にも見ゆるなり矢つちの山ありなり矢つちの山ありなり

かづ じょう
引 けい
や けい
は けい
ご けい
り けい
せん けい
か

一、腰志う菊あを一

[illegible]

和為久一

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

外
りやうと。あやさん
ん

[illegible][illegible]

リ
ん
リ
フ
ト

後のアリヤセリウトイは前のいゝ意遣ふるを避ひ

其の如く年頃の所を信じてゐるがごとく思ふ

と
鯉
こ
し
ゆ
た
つ
こ
ふ
や
り
や
こ
い
ろ
い
と
あ
め

○
う
月
さ
ま
い
く
う
つ
う
十
二

ち
う
つ
ま
え
年
わ
ア
サ
ち
う
う

あゝこゝろにてこのことせうんて
ちやんにたかよ
お葉とく

あア
ぶらう
一休、
こころ
た
アへ
と
その由
どうした
水戸の
大工

どの大に
 みんな
 ありて
 ちいさつた
 その大に
 た
 たい

つて
ちう
ちう
あ
ちう
ちう

これより幼少の童謡としてあるものなるを

[illegible]

公三子
 長子
 次子
 三子

[illegible]

迷磨の外は皆来りし
 款人坊主、武家など、いかに
 来りし所家のゆゑ

二月の昔より高人
 今に絶てさうぬものか
 花をみてもさうぬものか

中々此の通り

今絶てきぬものか
 本生をいふものか
 教をいふものか
 病をいふものか
 病をいふものか

船の如く
碇を打てば
一か所にと
止まりて
安んずる

酒入は地獄の門なり
紅毛紙

年 双六
 佛 扇 竹 西 月

新の如きものまで茶碗は形々のあり
 せしものもあれどもものなる
 今もあまのり「名」にあれども
 好むせはてうり「本」うで
 年玉を角を「買」いにく「買」入る
 年玉の桐の箱「致」せぬの如く茶碗茶
 し「中」然「て」あれど内「心」

三ノ川
あゝのふと今花を咲かせらぬものは

そはらうい物をあましく
なすをばうに

ひさの徳のたより

手遊む文福茶をてのすし
 手遊む文福茶をてのすし

これい山椒のあま皮を湯あはして蒸すといふに
ふりて七文のハ男竹をくりぬき七月精霊
より女竹をくりぬき

[illegible]

山川白而や白所
船のなかよりちたやと金太郎と飛んで見たよ
うなづきやかりし鶴川深川名物わりんとウリ

[illegible]

武進金溪
文后
文音
經印



武藏金澤文庫
彌名寺所藏



金沢
松田
の
方
鐘

金沢より松田寺より通龍華寺の鐘は天文の年号あり
松田寺の鐘は弘仁の改铸とみえたり改铸を再改铸せし
にあらずやと三村妙清氏の説なり云々云々松田寺の鐘は
もろく松田東照寺に在りて子の鐘も行方寺の寺を改铸
せしものなり又松田寺の鐘は延文と云ふ
七月と云ふことあり云々

必藏
寺
の
鐘

必藏寺に傳へ供する何のゆえと云ふをもちて一説あり
ある寺中因果必藏と云ふあり以前必藏寺は必藏寺
の或る大家の屋敷場より發見したり云々松田寺の鐘
は必藏に納めたり云々今に在る鐘は必藏寺の鐘と云ふ
とこれに果はる否や云々云々必藏寺の鐘は必藏寺の鐘
に在るを記し必藏寺に納めたり云々必藏寺の鐘は必藏寺の鐘

[illegible]

晴風翫玩具集所載之玩具目錄

國高松
重原
初
久并

伏見燒入形

梅子花の形を賀と銘する

京新古製三抄人形

產之其形

おみよ
一十
人
形

金只玩貝煉物態形

茂川
之
人
并

海女新入形

之時漢天子劉都世立之發人形

姓の
がら

東京旭留
江戸時代の旭留
遠く見ゆの玉旭
熟成土旭
東京旭留
東京旭留
静園市旭留
佛國製木彫旭留
遠く見ゆの玉旭
越中ふの玉旭

(Faint handwritten Japanese calligraphy)

中心道本抄也
 第一
 第二
 第三
 第四
 第五
 第六
 第七
 第八
 第九
 第十

明治三十九年六月

故清水墳凡翁是のりや 既災連磨の月端を
記しし

新嘉特許活動連磨
越り石の連磨
吉備津の連磨
然綿張の連磨
南部竹壽製連磨根付
栗山仙を藤十川豊三化連磨
遠方見付
備中一宮吉備神社
大坂の昆布連磨
勢水埴乃松坂の連磨

備後の豆連磨
江戸の豆連磨
弘前の連磨笛
仙臺の連磨
京のかき女郎
江戸のかき上り
江戸の文形連磨
京都の女連磨
九郎のかき娘

江戸煉物製
 古銀二京都
 甲斐甲府白だま
 甲府の通達磨
 桑城みねと所
 會井
 美術人の女達
 越後柏崎
 西新井
 加茂川人の達磨
 江戸の人の達磨
 何勢如の達磨

大坂今更す式の達磨
 かおろ今更すの達磨
 大坂新築御持たす
 加州今更す女達
 江戸の人の達磨
 江戸の人の達磨
 本願寺達磨
 北門南七條大竹みね
 島津高島一乃形
 赤坂近時
 岸前園山

大坂三達磨
 宝くじだま
 信州如本
 藤原如本
 大坂
 吉原如本
 以上如本達磨
 異なるものなり

越中富山
 奥州如本
 龍崎如本
 かおろ如本
 久吉如本
 川崎大坂如本
 以上如本の月あれと製此の

共七日錄卷五終

同五



This image shows a detail of a Japanese book cover, likely a traditional slipcase (hishi). It features a prominent diagonal design. The upper-left portion is a vibrant red, while the lower-right portion is a light cream or off-white. A wide, white diagonal band bisects the cover. Large, bold black calligraphic characters are painted across this white band. The characters are written in a highly stylized, expressive cursive script (sōsho). The overall aesthetic is minimalist and elegant, characteristic of traditional Japanese bookbinding.

This image shows a detail of a Japanese ink wash painting (suiboku-ga). The composition is dominated by bold, fluid, and expressive brushstrokes in dark ink, set against a light, textured background. The strokes are arranged vertically, with some appearing as thick, dark, calligraphic characters and others as more abstract, gestural marks. The painting is mounted on a light-colored, textured surface, possibly a scroll or a panel, with visible vertical lines indicating the binding or mounting structure. The overall style is characteristic of traditional Japanese ink painting, emphasizing the dynamic movement and energy of the brushwork.

卷之四

